

精読会について

■ 精読会——読むための知恵を身につける

1) 目的

- ・ テクストの豊かさを味わい尽くす。
- ・ 文学からあらゆるものへ。文学だけでなく、美術を、演劇を、音楽を、そして芸術一般を、さらには人間を、世界を「読むため」の知恵を身につける。
- ・ 読書の量のみならず読書の質も。事象に一対一で対応する知識を増やすだけでなく、なんにでも通用する思考の枠組である「知恵」も身につける。
- ・ 理解するだけでなく実践できるように。特定のテキストへの新しいアプローチを知るだけでなく、きょう出会うテキストをそのアプローチで読める手つきを「身につける」。

2) 方法

- ・ 月に1回ほど実施。2～3回で1セット。人文科学の名著を読むとともに、その理論・思想をあえてなぞって文学作品の名著を読む。
- ・ 理論編として、はじめの1～2回で、テキストの「読み」にかかわる理論書や「読み」のお手本となる評論書を読む。
- ・ 理論編のテキストは全員で選び、それを全員が読んでくる。発表者はそのテキストにおける考え方や手つきを「使える」かたちにまとめてくる。
- ・ 実践編として、つぎの1回で、その考え方や手つきを「使って」任意の文学作品を読む。
- ・ 実践編のテキストは発表者が選び、それを全員が読んでくる。発表者は「読み」の一例を準備してくる。

3) 理論編の具体例（思いつくままに）

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| ・ バルト『S/Z』（構造主義） | ・ ゴフマン『行為と演技』（ドラマツルギー） |
| ・ バトラー『ジェンダー・トラブル』（クィア） | ・ バフチン『ドストエフスキーの詩学』（ホリフォニー） |
| ・ モース『贈与論』（交換・贈与） | ・ ジラール『欲望の現象学』（三者関係） |